

野菊の墓

伊藤左千夫

野菊の墓

伊藤左千夫

後の月という時分が来ると、どうも思わずには居られない。幼い訣とは思うが何分にも忘れることが出来ない。もはや十年一余も過去った昔のことであるから、細かい事実は多くは覚えて居ないけれど、心持だけは今なお昨日の如く、その時の事を考えてると、全く当時の心持に立ち返って、涙が留めどなく湧くのである。悲しくもあり楽しくもありというような状態で、忘れようと思うこともないではないが、寧ろ繰返し繰返し考えては、夢幻的の興味を貪って居る事が多い。そんな訣から一寸物に書いて置こうかという気になったのである。

僕の家というのは、松戸から二里ばかり下って、矢切の渡を東へ渡り、小高い岡の上でやはり矢切村と云ってる所。矢切の斎藤と云えば、この界限での旧家で、里見の崩れが二三人ここへ落ちて百姓になった内の一人が斎藤と云ったのだと祖父から聞いて居る。屋敷の西側に一丈五六尺も廻るような椎の樹が四五本重なり合って立って居る。村一番の忌森で

村じゅうから羨ましがられて居る。昔から何ほど暴風が吹いても、この椎森のために、僕の家ばかりは屋根を剥がれたことはただの一度もないとの話だ。家なども随分と古い、柱が残らず椎の木だ。それがまた煤やら垢やらで何の木か見分けがつかぬ位、奥の間の最も煙に遠いところでも、天井板がまるで油炭で塗った様に、板の木目も判らぬほど黒い。それでも建ちは割合に高くて、簡単な欄間もあり銅の釘隠なども打ってある。その釘隠が馬鹿に大きい雁であった。勿論一寸見たのでは木か金かも知れないほど古びている。

僕の母なども先祖の言い伝えだからといって、この戦国時代の遺物的古家を、大へんに自慢されていた。その頃母は血の道で久しく煩って居られ、黒塗的な奥の一間がいつも母の病褥となって居た。その次の十畳の間の南隅に、二畳の小座敷がある。僕が居ない時は機織場で、僕が居る内は僕の読書室にしていた。手摺窓の障子を明けて頭を出すと、椎の枝が青空を遮って北を掩っている。

母が永らくぶらぶらして居たから、市川の親類で僕には縁の従妹になつて居る、民子という女の児が仕事の手伝やら母の看護やらに来て居った。僕が今忘れることが出来ないというのは、その民子と僕との関

係である。その関係と云つても、僕は民子と下劣な関係をしたのではない。

僕は小学校を卒業したばかりで十五歳、月を数えると十三歳何ヶ月という頃、民子は十七だけれどそれも生れが晚いから、十五と少しにしかならない。痩せぎすであつたけれども顔は丸い方で、透き徹るほど白い皮膚に紅味をおんだ、誠に光沢の好い児であつた。いつでも活々として元気がよく、その癖気は弱くて憎気の少しもない児であつた。

勿論僕とは大の仲好しで、座敷を掃くと云つては僕の所をのぞく、障子をはたくと云つては僕の座敷へ這入ってくる、私も本が読みたいの習がしたいのと云う、たまにはハタキの柄で僕の背中を突いたり、僕の耳を摘まんだりして逃げてゆく。僕も民子の姿を見れば来い来いと云うて二人で遊ぶのが何より面白かつた。

母からいつでも叱られる。

「また民やは政の所へ這入つてるナ。コラアさつさと掃除をやってしまえ。これからは政の読書の邪魔などしてはいけません。民やは年上の癖に……」

などと頻りに小言を云うけれど、その実母も民子をば非常に可愛がつて居るのだから、一向に小言がきかない。私にも少し手習をさせて……などと時々民子はだだをいう。そういう時の母の小言もきまつている。「お前は手習よか裁縫です。着物が満足に縫えなくては女 一人前として嫁にゆかれません」

この頃僕に一点の邪念が無かつたは勿論であれど、民子の方にも、いやな考えなどは少しも無かつたに相違ない。しかし母がよく小言を云うにも拘らず、民子はなお朝の御飯だ昼の御飯だというては僕を呼びにくる。呼びにくる度に、急いで這入つて来て、本を見せるの筆を借せのと云つてはしばらく遊んでいる。その間にも母の薬を持ってきた帰りや、母の用を達した帰りには、きつと僕の所へ這入ってくる。僕も民子がのぞかない日は何となく淋しく物足らず思われた。今日は民さんは何をしているかナと思ひ出すと、ふらふらツと書室を出る。民子を見にゆくと、いふほどの心ではないが、一寸民子の姿が目に触れば気が落着くのであつた。何のこつたやっばり民子を見に来たんじゃないかと、自分で自分を嘲つた様なことがしばしばあつたのである。

村の或家さ替女がとまつたから聴きにゆかないか、祭文がきたから聴きに行こうのと近所の女共が誘うても、民子は何とか断りを云うて決し

て家を出ない。隣村の祭で花火や飾物があるからとの事で、例の向うのお浜や隣のお仙等が大騒ぎして見にゆくというに、内のもらまで民さんも一所に行つて見てきたらと云うても、民子は母の病気を言い前にして行かない。僕も余りそんな所へ出るは嫌であつたから家に居る。民子は狐鼠狐鼠と僕の所へ這入つてきて、小声で、私は内に居るのが一番面白いわと云つてニツコリ笑う。僕も何となし民子をばそんな所へやりたくなかつた。

僕が三日置き四日置きに母の薬を取りに松戸へゆく。どうかすると帰りが晩くなる。民子は三度も四度も裏坂の上まで出て渡しの方を見ていたそうで、いつでも家中のものに冷かされる。民子は真面目になつて、お母さんが心配して、見てお出で見てお出でというからだと言ひ訣をする。家の者は皆ひそひそ笑つてゐるとの話であつた。

そういう次第だから、作おんなのお増などは、無上と民子を小面憎がつて、何かというと、

「民子さんは政夫さんどこへ許り行きたがる、隙さえあれば政夫さんにこびりついている」

などと頻りに云いはやしたらしく、隣のお仙や向うのお浜等までかれこれ噂をする。これを聞いてか嫂が母に注意したらしく、或日母は常になくむずかしい顔をして、二人を枕もとへ呼びつけ意味有り気な小言を云うた。

「男も女も十五六になればもはや児供ではない。お前等二人が余り仲が好過ぎるとて人がかれこれ云うそうじゃ。気をつけなくてはいけない。民子が年かさの癖によくはない。これからはもう決して政の所へなど行くことはならぬ。吾子を許すではないが政は未だ児供だ。民やは十七ではないか。つまらぬ噂をされるとお前の体に疵がつく。政夫だつて気をつけろ……。来月から千葉の中学へ行くんじゃないか」

民子は年が多いし且は意味あつて僕の所へゆくであろうと思われたと気がついたか、非常に愧じ入つた様子に、顔真赤にして俯向いている。常は母に少し位小言云われても随分だをいうのだけれど、この日はただ両手をついて俯向いたきり一言もいわない。何の疚しい所のない僕は頗る不平で、

「お母さん、そりゃ余り御無理です。人が何と云つたつて、私等は何の訣もないのに、何か大変悪いことでもした様なお小言じゃありませんか。お母さんだつていつもそう云つてたじゃありませんか。民子とお前とは

兄弟も同じだ、お母さんの眼からはお前も民子も少しも隔てはない、仲よくしろよといつでも云ったじゃありませんか」

母の心配も道理のあることだが、僕等もそんないやらしいことを云われようとは少しも思つて居なかつたから、僕の不平もいくらかの理はある。母は俄にやさしくなつて、

「お前達に何の訣もないことはお母さんも知つてるがネ、人の口がうるさいから、ただこれから少し気をつけてと云うのです」

色青ざめた母の顔にもいつしか僕等を真から可愛がる笑みが湛えて居る。やがて、

「民やはあのまた薬を持ってきて、それから縫掛けの裕を今日中に仕上げてしまいなさい……。政は立つた次手に花を剪つて仏壇へ捧げて下さい。菊はまだ咲かないか、そんなら紫苑でも切つてくれよ」

本人達は何の気なしであるのに、人がかれこれ云うのでかえつて無邪気でいられない様にしてしまう。僕は母の小言も一日しか覚えていない。二三日たつて民さんはなぜ近頃は来ないのか知らんと思つた位であつたけれど、民子の方では、それからというもの様子がからつと變つてしまつた。

民子はその後僕の所へは一切顔出ししないばかりでなく、座敷の内で行逢つても、人のいる前などでは容易に物も云わない。何となく極りわるそうに、まぶしい様な風で急いで通り過ぎて終う。抛処なく物を云うにも、今までの無遠慮に隔てのない風はなく、いやに丁寧に改まつて口をきくのである。時には僕が余り俄に改まつたのを可笑しがつて笑えば、民子も遂には袖で笑いを隠して逃げてしまふという風で、とにかく一重の垣が二人の間に結ばれた様な気合になつた。

それでも或日の四時過ぎに、母の云いつけで僕が背戸の茄子畑に茄子をもいで居ると、いつのまにか民子が箆を手に持つて、僕の後にきていた。

「政夫さん……」

出し抜けに呼んで笑っている。

「私もお母さんから云いつかつて来たのよ。今日の縫物は肩が凝つたらう、少し休みながら茄子をもいできてくれ。明日一麴漬をつけるからつて、お母さんがそう云うから、私飛んできました」

民子は非常に嬉しそうに元氣一パイで、僕が、

「それでは僕が先にきているのを民さんは知らないで来たの」

と云うと民子は、

「知らなくてサ」

にここにこしながら茄子を採り始める。

茄子畑というは、椎森の下から一重の藪を通り抜けて、家より西北に当る裏の前栽畑。崖の上になつてるので、利根川は勿論中川までもかすかに見え、武蔵一えんが見渡される。秩父から足柄箱根の山山、富士の高峯も見える。東京の上野の森だと云うのもそれらしく見える。水のように澄みきつた秋の空、日は一間半ばかりの辺に傾いて、僕等二人が立つて居る茄子畑を正面に照り返して居る。あたり一体にシンとしてまた如何にもハッキリとした景色、吾等二人は真に画中の人である。

「マア何という好い景色でしょう」

民子もしばらく手をやめて立った。

僕はここで白状するが、この時の僕は慥に十日以前の僕ではなかった。二人は決してこの時無邪気な友達ではなかった。いつの間にそういう心持が起つて居たか、自分には少しも判らなかつたが、やはり母に叱られた頃から、僕の胸の中にも小さな恋の卵が幾個か湧きそめて居つたに違いない。僕の状態がいつの間にか変化してきたは、隠すことの出来

ない事実である。この日初めて民子を女として思ったのが、僕に邪念の萌芽ありし何よりの証拠じゃ。

民子が体をくの字にかがめて、茄子をもぎつつあるその横顔を見て、今更のように民子の美しく可愛らしさに気がついた。これまでも可愛らしいと思わぬことはなかつたが、今日はしみじみとその美しさが身にしてみた。しなやかに光沢のある鬢の毛につつまれた耳たぼ、豊かな頬の白く鮮かな、顎のくくしめの愛らしさ、頸のあたり如何にも清げなる、藤色の半襟や花染の襷や、それらが悉く優美に眼にとまった。そうなると恐ろしいもので、物を云うにも思い切った言は云えなくなる、羞かしくなる、極りが悪くなる、皆例の卵の作用から起ることである。

ここ十日ほど仲垣の隔てが出来て、ロクロク話もせなかつたから、これも今までならば無論そんなこと考えもせぬにきまつて居るが、今日はここで何か話さねばならぬ様な気がした。僕は初め無造作に民さんと呼んだけれど、跡は無造作に詞が継がない。おかしく喉がつかまつて声が出ない。民子は茄子を一つ手に持ちながら体を起して、

「政夫さん、なに……」

「何でもないけど民さんは近頃へんだからさ。僕なんかすっかり嫌いに

なつたようなもの」

民子はさすがに女性で、そういうことには僕などより遙に神経が鋭敏になっている。さも口惜しそうな顔して、つと僕の側へ寄ってきた。

「政夫さんはあんまりだわ。私がいづ政夫さんに隔てをしました……」

「何さ、この頃民さんは、すっかり変つちまつて、僕なんかには用はないらしいからよ。それだつて民さんに不足を云う訣ではないよ」

民子はせきこんで、

「そんな事いうはそりや政夫さんひどいわ、御無理だわ。この間は二人を並べて置いて、お母さんにあんなに叱られたじゃありませんか。あなたは男ですから平気でお出でだけど、私は年は多いし女ですもの、ああ云われては実に面目がないじゃありませんか。それですから、私は一生懸命になつてたしなんで居るんです。それを政夫さん隔てるの嫌になつたらうのと云うんだもの、私はほんとにつまらない……」

民子は泣き出しそうな顔つきで僕の顔をじいっと視ている。僕もただ話の小口にそう云うたまでであるから、民子に泣きそうになられては、かわいそうに気の毒になつて、

「僕は腹を立つて言ったでは無いのに、民さんは腹を立つたの……僕は

ただ民さんが俄に變つて、逢つても口もきかず、遊びにも来ないから、いやに淋しく悲しくなつちまつたのさ。それだからこれからも時時は遊びにお出でよ。お母さんに叱られたら僕が咎を背負うから……人が何と云つたつてよいじゃないか」

何というても児供だけに無茶なことをいう。無茶なことを云われて民子は心配やら嬉しいやら、嬉しいやら心配やら、心配と嬉しいとが胸の中で、ごつたになつて争うたけれど、とうとう嬉しい方が勝を占めて終つた。なお三言四言話をするうちに、民子は鮮かな曇りのない元の元氣になつた。僕も勿論愉快が溢れる……、宇宙間にただ二人きり居るような心持にお互になつたのである。やがて二人は茄子のもぎくらをする。大きな畑だけれど、十月の半過ぎでは、茄子もちらほらしかかつて居ない。二人で漸く二升ばかり宛を採り得た。

「まア民さん、御覧なさい、入日の立派なこと」

民子はいつしか笹を下へ置き、両手を鼻の先に合せて太陽を拝んでいる。西の方の空は一体に薄紫にぼかした様な色になつた。ひた赤く赤いばかりで光線の出ない太陽が今その半分を山に埋めかけた処、僕は民子が一人心入日を拝むしおらしい姿が永く眼に残つてゐる。

二人が余念なく話をしながら帰ってきて、背戸口の四つ目垣の外にお増がぼんやり立って、こつちを見て居る。民子は小声で、

「お増がまた何とか云いますよ」

「二人共お母さんに云いつかって来たのだから、お増なんか何と云ったって、かまやしないさ」

一事件を経る度に二人が胸中に湧いた恋の卵は層を増してくる。機に触れて交換する双方の意志は、直に互いの胸中にある例の卵に至大な養分を給与する。今日の日暮はたしかにその機であった。ぞつと身振いをするほど、著しき徴候を現したのである。しかし何というても二人の關係は卵時代で極めて取りとめがない。人に見られて見苦しい様なこともせず、顧みて自ら疚しい様なこともせぬ。従つてまだまだ暢気なもので、人前を繕うと云う様な心持は極めて少なかった。僕と民子との關係も、この位でお終いになったならば、十年忘れられないというほどにはならなかつただろうに。

親というものはこの親も同じで、吾子をいつまでも児供のように思っている。僕の母などもその一人に漏れない。民子はその後時折僕の書室へやってくるけれど、よほど人目を計らつて気ばねを折ってくる様な

風で、いつきても少しも落着かない。先に僕に厭味を云われたから仕方なしにくるかとも思われたが、それは間違つていた。僕等二人の精神状態は二三日と云われぬほど著しき変化を遂げている。僕の変化は最も甚しい。三日前には、お母さんが叱れば私が科を背負うから遊びにきてとまで無茶を云うた僕が、今日はとてもそんな訣のものでない。民子が少し長居をすると、もう気が咎めて心配でならなくなった。

「民さん、またお出よ、余り長く居ると人がつまらぬことを云うから」

民子も心持は同じだけれど、僕にもう行けと云われると妙にすねだす。「あしあなたは先日何と云いました。人が何と云ったってよいから遊びに来てと云いはしませんか。私はもう人に笑われてもかまいませんの」

困った事になった。二人の關係が密接するほど、人目を恐れてくる。人目を恐れる様になつては、もはや罪惡を犯しつつあるかの如く、心もおどするのであった。母は口でこそ、男も女も十五六になれば児供ではないと云つても、それは理窟の上のことで、心持ではまだまだ二人をまるで児供の様に思っているから、その後民子が僕の室へきて本を見たり話をしたりしているのを、直ぐ前を通りながら一向気に留める様子もない。この間の小言も実は嫂が言うから出たままで、ほんとうに腹か

ら出た小言ではない。母の方はそうであつたけれど、兄や嫂やお増などは、盛に陰言をいうて笑っていたらしく、村中の評判には、二つも年の多いのを嫁にする気かしらんなどと専らうていとの話。それやこれやのことが薄々二人に知れたので、僕から言いだして当分二人は遠ざかる相談をした。

人間の心持というものは不思議なもの。二人が少しも隔意なき得心上の相談であつただけれど、僕の方から言い出したばかりに、民子は妙に鬱ぎ込んで、まるで元気がなくなり、悄然としているのである。それを見ると僕もまたたまらなく気の毒になる。感情の一進一退はこんな風にもつれつつ危くなるのである。とにかく二人は表面だけは立派に遠ざかつて四五日を経過した。

陰暦の九月十三日、今夜が豆の月だという日の朝、露霜が降りたと思うほどつめたい。その代り天気はきらきらしている。十五日がこの村の祭で明日は宵祭という訣故、野の仕事も今日一渡り極りをつけねばならぬ所から、家中手分けをして野へ出る事になった。それで甘露の恩命が僕等一兩人に下つたのである。兄夫婦とお増と外に男一人とは中稲の刈残りを是非刈つて終わねばならぬ。民子は僕を手伝いとして山畑の棉を採つてくる事になった。これはもとより母の指図で誰にも異議は云えない。

「マアあの二人を山の畑へ遣るッて、親というものよッぽどお目出たいものだ」

奥底のないお増と意地曲りの嫂とは口を揃えてそう云つたに違いない。僕等二人はもとより心の底では嬉しいに相違ないけれど、この場合二人で山畑へゆくとなつては、人に顔を見られる様な気がして大いに極りが悪い。義理にも進んで行きたがる様な素振りには出来ない。僕は朝飯前は書室を出ない。民子も何か愚図愚図して支度もせぬ様子。もう嬉しがつてと云われるのが口惜しいのである。母は起きてきて、

「政夫も支度しろ。民やもさつさと支度して早く行け。二人でゆけば一日には楽な仕事だけれど、道が遠いのであるから、早く行かないと歸りが夜になる。なるたけ日の暮れない内に歸ってくる様によ。お増は二人の弁当を揃えてやつてくれ。お菜はこれこれの物で……」

まことに親のこころだ。民子に弁当を揃えさせては、自分のであるから、お菜などは口クな物を持って行かないと気がついて、ちゃんとお増

に命じて拵えさせたのである。僕はズボン下に足袋裸足麦藁帽という出で立ち、民子は手指を佩いて股引も佩いてゆけと母が云うと、手指ばかり佩いて股引佩くのにぐずぐずしている。民子は僕のところへきて、股引佩かないでもよい様にお母さんにそう云ってくれと云う。僕は民さんがそう云いなさいと云う。押問答をしている内に、母はききつけて笑いながら、

「民やは町場者だから、股引佩くのは極りが悪いかい。私はまたお前が柔かい手足へ、茨や薄で傷をつけるが可哀相だから、そう云ったんだが、いやだと云うならお前のすきにするがよいさ」

それで民子は、例の襷に前掛姿で麻裏草履という支度。二人が一斗笠一個宛を持ち、僕が別に番ニヨ片籠と天秤とを肩にして出掛ける。民子が跡から菅笠を被って出ると、母が笑声で呼びかける。

「民や、お前が菅笠を被って歩くと、ちょうど木の子が歩くようで見つともない。編笠がよかるう。新しいのが一つあった筈だ」

稻刈連は出てしまつて別に笑うものもなかったけれど、民子はあわて菅笠を脱いで、顔を赤くしたらしかった。今度は編笠を被らずに手に持つて、それじゃお母さんいつてまいりますと挨拶して走つて出た。

村のものらもかれこれいと聞いているので、二人揃うてゆくも人前恥かしく、急いで村を通抜けようとの考えから、僕は一足先になつて出掛ける。村はずれの坂の降口の大きな銀杏の樹の根で民子のくるのを待った。ここから見おろすと少しの田圃がある。色よく黄ばんだ晩稲に露をおんで、シットリと打伏した光景は、気のせいか殊に清々しく、胸のすくような眺めである。民子はいつの間にか来ていて、昨日の雨で洗い流した赤土の上に、二葉三葉銀杏の葉の落ちるのを拾っている。

「民さん、もうきたかい。この天気の良いことどうです。ほんとに心持のよい朝だね」

「ほんとに天気がよくて嬉しいわ。このまア銀杏の葉の綺麗なこと。さア出掛けましょう」

民子の美しい手で持つてると銀杏の葉も殊に綺麗に見える。二人は坂を降りてようやく窮屈な場所から広場へ出た気になった。今日は大きいそでで棉を採り片付け、さんさん面白いことをして遊ぼうなどと相談しながら歩く。道の真中は乾いているが、両側の田についている所は、露にしとしと濡れて、いろいろの草が花を開いている。タウコギは未枯れて、水蕎麦蓼など一番多く繁っている。都草も黄色く花が見える。野菊がよ

るよると咲いている。民さんこれ野菊がと僕は吾知らず足を留めたけれど、民子は聞えないのかさつきと先へゆく。僕は一寸 脇へ物を置いて、野菊の花を一握り採った。

民子は一町ほど先へ行つてから、気がついて振り返るや否や、あれつと叫んで駆け戻ってきた。

「民さんはそんなに戻つてきないたつて僕が行くものを……」

「まア政夫さんは何をしていたの。私びっくりして……まア綺麗な野菊、政夫さん、私に半分おくれつたら、私ほんとうに野菊が好き」

「僕はもともとから野菊がだい好き。民さんも野菊が好き……」

「私なんでも野菊の生れ返りよ。野菊の花を見ると身振いの出るほど好ましいの。どうしてこんなかと、自分でも思う位」

「民さんはそんなに野菊が好き……道理でどうやら民さんは野菊のような人だ」

民子は分けてやった半分の野菊を顔に押しあてて嬉しがった。二人は歩きだす。

「政夫さん……私野菊の様だつてどうしてですか」

「さアどうしてということはないけど、民さんは何がなし野菊の様な風

だからさ」

「それで政夫さんは野菊が好きだつて……」

「僕大好きさ」

民子はこれからはあなたが先になつてと云いながら、自らは後になつた。今の偶然に起つた簡単な問答は、お互の胸に強く有意味に感じた。民子もそう思つた事はその素振りで解る。ここまで話が迫ると、もうその先を言い出すことは出来ない。話は一寸途切れてしまった。

何と言つても若い兩人は、今罪の神に翻弄せられつつあるのであれど、野菊の様な人だと云つた詞について、その野菊を僕はだい好きだと云つた時すら、僕は既に胸に動悸を起した位で、直ぐにそれ以上を言い出すほどに、まだまだずうずうしくはなっていない。民子も同じこと、物に突きあつた様な心持で強くお互に感じた時に声はつまつてしまったのだ。二人はしばらく無言で歩く。

真に民子は野菊の様な児であつた。民子は全くの田舎風ではあつたが、決して粗野ではなかつた。可憐で優しくてそうして品格もあつた。厭味とか憎気とかいう所は爪の垢ほどもなかつた。どう見ても野菊の風だつた。

しばらくは黙っていたけれど、いつまで話もしないでいるはなおおかしい様に思つて、無理と話を考え出す。

「民さんはさつき何を考えてあんなに脇見もしないで歩いていたの」「わたし何も考えていやしませんが」

「民さんはそりゃ嘘だよ。何か考えごとでもしなくてあんな風をする訣はないさ。どんなことを考えていたのか知らないけれど、隠さないだつてよいじゃないか」

「政夫さん、済まない。私さつきほんとに考事していました。私つくづく考えて情なくなつたの。わたしはどうして政夫さんよか年が多いんでしよう。私は十七だと言うんだもの、ほんとに情なくなるわ……」

「民さんは何のこと言うんだらう。先に生れたから年が多い、十七年育つたから十七になつたのじゃないか。十七だから何で情ないのですか。僕だつて、さ来年になれば十七歳さ。民さんはほんとに妙なことを云う人だ」

僕も今民子が言つたことの心を解せぬほど児供でもない。解つてはいるけど、わざと戯れの様に見えるので、振りかえつて見ると、民子は真に考え込んでいる様であつたが、僕と顔合せて極りわるげににわかにか側を向いた。

こうなつてくると何をいうても、直ぐそこへ持つてくるので話がゆきつまつてしまう。二人の内どちらか一人が、すこしほんの僅かにでも押が強ければ、こんなに話がゆきつまるのではない。お互に心持は奥底まで解つているのだから、吉野紙を突破するほどにも力がありさえすれば、話の一步を進めてお互に開放してしまうことが出来るのである。しかしながら真底からおぼこな二人は、その吉野紙を破るほどの押がないのである。またここで話の皮を切つてしまわねばならぬと云う様な、はっきりした意識も勿論ないのだ。言わば未だ取止めのない卵的の恋であるから、少しく心の力が必要な所へくると話がゆきつまつてしまうのである。

お互に自分で話し出しては自分が極りわるくなる様なことを繰返しつつ幾町かの道を歩いた。詞数こそ少なけれ、その詞の奥には二人共に無量の思いを包んで、極りがわるい感情の中には何とも云えない深き愉快を湛えて居る。それでいわゆる足も空に、いつしか田圃も通りこし、山路へ這入つた。今度は民子が心を取り直したらしく鮮かな声で、

「政夫さん、もう半分道来ましようか。大長柵へは一里に遠いつて

云いましたねイ」

「そうです、一里半には近いそうだが、もう半分の余来ましたろうよ。少し休みましようか」

「わたし休まなくとも、ようございませうが、早速お母さんの罰があたつて、薄の葉でこんなに手を切りました。ちよいとこれで結わえて下さいな」

親指の中ほどで疵は少しだが、血が意外に出た。僕は早速紙を裂いて結わえてやる。民子が両手を赤くしているのを見た時非常にかわいそうであつた。こんな山の中で休むより、畑へ往つてから休もうというので、今度は民子を先に僕が後になつて急ぐ。八時少し過ぎと思う時分に大長柵の畑へ着いた。

十年許り前に親父が未だ達者な時分、隣村の親戚から頼まれて余儀なく買ったのだそうで、畑が八反と山林が二町ほどここにあるのである。この辺一体に高台は皆山林でその間の柵が畑になつて居る。越石を持っていると云えば、世間体はよいけど、手間ばかり掛つて割に合わないといつても母が言つてる畑だ。

三方林で囲まれ、南が開いて余所の畑とつづいている。北が高く南が低い傾斜になつている。母の推察通り、棉は末にはなつているが、風が吹いたら溢れるかと思うほど棉はえんでいる。点々として畑中白くなつているその棉に朝日がさしていると目ぶしい様に綺麗だ。

「まアよくえんであること。今日採りにきてよい事しました」

民子は女だけに、棉の綺麗にえんであるのを見て嬉しそうにそう云つた。畑の真中ほどに桐の樹が二本繁つている。葉が落ちかけて居るけれど、十月の熱を凌ぐには十分だ。ここへあたりの黍殻を寄せて二人が陣どる。弁当包みを枝へ釣る。天気の良いのに山路を急いだから、汗ばんで熱い。着物を一枚ずつ脱ぐ。風を懐へ入れ足を展して休む。青ぎつた空に翠の松林、百舌もどこかで鳴いている。声の響くほど山は静かなのだ。天と地との間で広い畑の真中に二人が話をしているのである。

「ほんとに民子さん、きょうというきょうは極楽の様な日ですわねイ」

顔から頸から汗を拭いた跡のつやつやしさ、今更に民子の横顔を見た。「そうですねイ、わたし何だか夢の様な気がするの。今朝 家を出る時はほんとに極りが悪くて……嫂さんには変な眼つきで視られる、お増には冷かされる、私はのぼせてしまいました。政夫さんは平気であるから憎らしかつたわ」

「僕だつて平気なもんですか。村の奴らに逢うのがいやだから、僕は一

足先に出て銀杏の下で民さんを待っていたんでア。それはそうと、民さん、今日はほんとに面白く遊ぼうね。僕は来月は学校へ行くんだし、今月とて十五日しかないし、二人でしみじみ話の出来る様なことはこれから先はむずかしい。あわれッぽいこと云うようだけど、二人の中も今日だけかしらと思うのよ。ねイ民さん……」

「そりゃア政夫さん、私は道々そればかり考えて来ました。私がさつきほんとに情なくなつてと言ったら、政夫さんは笑っておしまいなしたけど……」

面白く遊ぼう遊ぼう言うても、話を始めると直ぐにこうなつてしまふ。民子は涙を拭うた様であった。ちよつとよくそこへ馬が見えてきた。西側の山路から、がさがさ笹にさわる音がして、薪をつけた馬を引いて頼冠の男が出て来た。よく見ると意外にも村の常吉である。この奴はいつか向うのお浜に民子を遊びに連れだしてくれと頼んだという奴だ。いやな野郎がきやがったなと思うていると、

「や政夫さん。コンチャどうも結構なお天気ですな。今日は御夫婦で棉採りかな。洒落れますね。アハハハハハ」

「オウ常さん、今日は駄賃かな。大変早く御精が出ますね」

「ハア吾々なんざア駄賃取りでもして適に一盃やるより外に楽しみもないんですからな。民子さん、いやに見せつけますね。余り罪ですぜ。アハハハハハ」

この野郎失敬なと思つたけれど、吾々も余り威張れる身でもなし、笑いとぼけて常吉をやり過ごした。

「馬鹿野郎、実に厭なやつだ。さア民さん、始めましょう。ほんとに民さん、元氣をお直しよ。そんなにくよくよおしでないよ。僕は学校へ行つたて千葉だもの、盆正月の外にも来ようと思えば土曜の晩かけて日曜に来られるさ……」

「ほんとに済みません。泣面などして。あの常さんて男、何といういやな人でしょう」

民子は襷掛け僕はシャツに肩を脱いで一心に採つて三時間ばかりの間に七分通り片づけてしまった。もう跡はわけがないから弁当にしようという事にして桐の蔭に戻る。僕はかねて用意の水筒を持って、

「民さん、僕は水を汲んで来ますから、留守番を頼みます。帰りに『えびづる』や『あけび』をうんと土産に採つて来ます」

「私は一人で居るのはいやだ。政夫さん、一所に連れてつて下さい。さつ

きの様な人にも来られたら大変ですもの」

「だって民さん、向うの山を一つ越して先ですよ、清水のある所は。道という様な道もなくて、それこそ茨や薄で足が疵だらけになりますよ。水がなくちゃ弁当が食べられないから、困ったなア、民さん、待っていられるでしょう」

「政夫さん、後生だから連れて行って下さい。あなたが歩ける道なら私にも歩けます。一人でここにいるのはわたしやどうしても……」

「民さんは山へ来たら大変だだッ児になりましたネー。それじゃ一所に行きましょう」

弁当は棉の中へ隠し、着物はてんでに着てしまつて出掛ける。民子は頻りに、にこにこしている。端から見たならば、馬鹿馬鹿しくも見苦しくもあるうけれど、本人同志の身にとつては、そのらちもなき押問答の内にも限りなき嬉しみを感じるのである。高くもないけど道のない所をゆくのであるから、笹原を押分け樹の根につかまり、崖を攀ずる。しばしば民子の手を採って曳いてやる。

近く二三日以来の二人の感情では、民子が求めるならば僕はどんなことでも拒まれない、また僕が求めるならやはりどんなことでも民子は決して拒みはしない。そういう間柄でありつつも、飽くまで臆病に飽くまで気の小さな兩人は、嘗て一度も有意味に手などを採ったことはなかった。しかるに今日は偶然の事から屢手を採り合うに至った。這辺の一種云うべからざる愉快な感情は経験ある人にして初めて語ることが出来る。

「民さん、ここまですれば、清水はあすこに見えます。これから僕が一人で行ってくるからここに待つて居なさい。僕が見えて居たら居られるでしょう」

「ほんとに政夫さんの御厄介ですネ……そんなにだだを言つては濟まないから、ここで待ちましょう。あらア野葡萄があつた」

僕は水を汲んでの歸りに、水筒は腰に結いつけ、あたりを少し許り探つて、『あけび』四五十と野葡萄一もくさを採り、竜胆の花の美しいのを五六本見つけて歸ってきた。歸りは下りだから無造作に二人で降りる。畑へ出口で僕は春蘭の大きいのを見つけた。

「民さん、僕は一寸『アックリ』を掘つてゆくから、この『あけび』と『えびづる』を持つて行って下さい」

『アックリ』てなにい。あらア春蘭じゃありませんか」

「民さんは町場もんですから、春蘭などと品のよいこと仰しやるのです。矢切の百姓なんぞは『アックリ』と申しましてね、鞆の薬に致します。ハハハハ」

「あらア口の悪いこと。政夫さんは、きょうはほんとに口が悪くなったよ」
山の弁当と云えば、土地の者は一般に楽しみの一つとしてある。何か生理上の理由でもあるか知らんが、とにかく、山の仕事をしてやがてたべる弁当が不思議とうまいことは誰も云う所だ。今吾々二人は新らしき清水を扱み来り母の心を籠めた弁当を分けつつたべるのである。興味の尋常でないは言うも愚な次第だ。僕は『あけび』を好み民子は野葡萄をたべつつしばらく話をする。

民子は笑いながら、

「政夫さんは鞆の薬に『アックリ』とやらを採ってきて学校へお持ちになるの。学校で鞆がきれたらおかしいでしょうね……」

僕は真面目に、

「なアにこれはお増にやるのさ。お増はもうとうに鞆を切らしているでしょう。この間も湯に這入る時にお増が火を焚きにきて非常に鞆を痛がっているから、その内に僕が山へ行ったら『アックリ』を採ってきて

やると言ったのさ」

「まアあなたは親切な人ですことね……お増は陰日向のない憎気のない女ですから、私も仲好くしていたんですが、この頃は何となし私に突き当る様な事ばかり言つて、何でもわたしを憎んでいますよ」

「アハハハ、それはお増どんが焼餅をやくのです。つまらんことにもすぐ焼餅を焼くのは、女の癖さ。僕がそら『アックリ』を採っていつてお増にやると云えば、民さんがすぐに、まアあなたは親切な人とか何とか云うのと同じ訣さ」

「この人はいつのまにこんなに口がわるくなつたのでしょうか。何を言つても政夫さんにはかないやしない。いくら私だつてお増が根も底もない焼もちだ位は承知していますよ……」

「実はお増も不憫な女よ。両親があんなことになりさせねば、奉公人とまでなるのではない。親父は戦争で死ぬ、お袋はこれを嘆いたがもとの病死、一人の兄がはずれものという訣で、とうとうあの始末。国家のために死んだ人の娘だもの、民さん、いたわってやらねばならない。あれでも民さん、あなたをば大変ほめているよ。意地曲りの嫂にこきつかわれるのだから一層かわいそうでさ」

「そりゃ政夫さん私もそう思っ居ますさ。お母さんもよくそうおっしゃいました。つまらないものですけど何とかかとか分けてやってますが、また政夫さんの様に情深くされると……」

民子は云いさしてまた話を詰らしたが、桐の葉に包んで置いた竜胆の花を手を探つて、急に話を転じた。

「こんな美しい花、いつ探つてお出でなして。りんどうはほんとによい花ですね。わたしりんどうがこんなに美しいとは知らなかったわ。わたし急になりんどうが好きになった。おオエエ花……」

花好きな民子は例の癖で、色白の顔にその紫紺の花を押しつける。やがて何を思いだしてか、ひとりでにこにこ笑いだした。

「民さん、なんです、そんなにひとりで笑つて」

「政夫さんはりんどうの様な人だ」

「どうして」

「さアどうしてということはないけど、政夫さんは何がなし竜胆の様な風だからさ」

民子は言い終つて顔をかくして笑つた。

「民さんもよっぽど人が悪くなった。それでさっきの仇討という訣ですか。口真似なんか恐入りますナ。しかし民さんが野菊で僕が竜胆とは面白い対ですね。僕は悦んでりんどうになります。それで民さんがりんどうを好きになつてくれればなお嬉しい」

二人はこんならちもなき事いうて悦んでいた。秋の日足の短さ、日はようやく傾きそめる。さアとの掛声で棉もぎにかかる。午後の方は僅であつたから一時間半ばかりでもぎ終えた。何やかやそれぞれまとめて番二ヨに乗せ、二人で差しあいにかつぐ。民子を先に僕が後に、とぼとぼ畑を出掛けた時は、日は早く松の梢をかぎりかけた。

半分道も来たと思う頃は十三夜の月が、木の間から影をさして尾花にゆらぐ風もなく、露の置くさえ見える様な夜になった。今朝は気がつかなかったが、道の西手に一段低い畑には、蕎麦の花が薄絹を曳き渡したように白く見える。こおろぎが寒げに鳴いているにも心とめずにはいられない。

「民さん、くたぶれたでしょう。どうせおそくなつたんですから、この景色のよい所で少し休んで行きましょう」

「こんなにおそくなるなら、今少し急げばよかつたに。家の人達にきつと何とか言われる。政夫さん、私はそれが心配になるわ」

「今更心配しても追つかないから、まア少し休みましょう。こんなに景色のよいことは滅多にありません。そんなに人に申訣のない様な悪いこととはしないもの、民さん、心配することはないよ」

月あかりが斜にさしこんでいる道端の松の切株に二人は腰をかけた。目の先七八間の所は木の蔭で薄暗いがそれから向うは畑一ぱいに月がさして、蕎麦の花が際立って白い。

「何というえい景色でしょう。政夫さん歌とか俳句とかいうものをやったら、こんなときに面白いことが云えるでしょうね。私ら様な無筆でもこんな時には心配も何も忘れますもの。政夫さん、あなた歌をおやんなさいよ」

「僕は実は少しやっているけど、むずかしくて容易に出来ないのさ。山畑の蕎麦の花に月がよくて、こおろぎが鳴くなどは実にえいですなア。民さん、これから二人で歌をやりましょうか」

お互に一つの心配を持つ身となった二人は、内に思うことが多くてかえって話は少ない。何となく覚束ない二人の行末、ここで少しく話をしたかったのだ。民子は勿論のこと、僕よりも一層話したかったに相違ないが、年の至らぬのと浮いた心のない二人は、なかなか差向いでそんな

話は出来なかった。しばらくは無言でぼんやり時間を過ごすうちに、一列の雁が二人を促すかの様に空近く鳴いて通る。

ようやく田圃へ降りて銀杏の木が見えた時に、二人はまた同じ様に一種の感情が胸に湧いた。それは外でもない、何となく家に這入りづらいつらいつら。躊躇する暇もない、忽門前近く来てしまった。

「政夫さん……あなた先になつて下さい。私 極りわるくてしようがないわ」

「よしとそれじゃ僕が先になろう」

僕は頗る勇気を鼓し殊に平気な風を装うて門を這入った。家の人達は今夕飯最中で盛んに話が湧いているらしい。庭場の雨戸は未だ開いたなりに月が軒口までさし込んでいる。僕が咳払を一ツやって庭場へ這入ると、台所の話にはわかには止んでしまった。民子は指の先で僕の肩を撞いた。僕も承知しているのだ、今御膳会議で二人の噂が如何に盛んであったか。

宵祭ではあり十三夜ではあるので、家中表座敷へ揃うた時、母も奥から起きてきた。母は一通り二人の余り遅かったことを咎めて深くは言わ

なかつたけれど、常とは全く違っていた。何か思っているらしく、少しも打解けない。これまでは口には小言を言うても、心中に疑わなかったのだが、今夜は口には余り言わないが、心では十分に二人に疑いを起したに違いない。民子はいよいよ小さくなって座敷 中へは出ない。僕は山から採ってきた、あけびや野葡萄やを沢山座敷 中へ並べ立てて、暗に僕がこんな事をして居たから遅くなったのだとの意を示し無言の弁解をやつても何のききめもない。誰一人それをそうと見るものはない。今夜は何の話にも僕等二人は除けものにされる始末で、もはや二人は全く罪あるものと黙決されてしまったのである。

「お母さんがあんまり甘過ぎる。あアして居る二人を一所に山畑へやるとは目のないにもほどがある。はたでいくら心配してもお母さんがあれでは駄目だ」

これが台所会議の決定であつたらしい。母の方でもいつまで児供と思つていたが誤りで、自分が悪かつたという様な考えに今夜はなつたのである。今更二人を叱つて見ても仕方がない。なに政夫を学校へ遣つてしまひさえせば仔細はないと母の心はちゃんときまつて居るらしく、「政や、お前は十一月へ入つて直ぐ学校へやる積りであつたけれど、そうしてぶらぶらして居ても為にならないから、お祭が終わつたら、もう学校へゆくがよい。十七日にゆくとしろ……えいか、そのつもりで小支度して置け」

学校へゆくは固より僕の願い、十日や二十日早くとも遅くともそれに仔細はないが、この場合しかも今夜 言渡があつて見ると、二人は既に罪を犯したものと定められての仕置であるから、民子は勿論僕に取つてもすこぶる心苦しい処がある。実際二人はそれほど墮落した訣でないから、頭からそうときめられては、聊か妙な心持がする。さりとして弁解の出来ることでもなし、また強いことを言える資格も実は無いのである。これが一ヶ月前であつたらば、それはお母さん御無理だ、学校へ行くのは望みであるけど、科を着せられての仕置に学校へゆけとはあんまりでしょう……などと直ぐだを言うのであるが、今夜はそんな我儘を言えるほど無邪気ではない。全くの処、恋に陥つてしまつている。

あれほど可愛がられた一人の母に隠立てをする、何となく隔てを作つて心のありたけを言い得ぬまになつてゐる。おのずから人前を憚り、人前では殊更に二人がうとうとしく取りなす様になつてゐる。かくまで私心が長じてきてどうして立派な口がきけよう。僕はただ一言、

「はア……」

と答えたきりなんにも言わず、母の言いつけに盲従する外はなかった。「僕は学校へ往つてしまえばそれでよいけど、民さんは跡でどうなるだろうか」

不図そう思つて、そつと民子の方を見ると、お増が枝豆をあさつてる後に、民子はうつむいて膝の上に襷をこねくりつつ沈黙している。如何にも元氣のない風で夜のせいかな顔色も青白く見えた。民子の風を見て僕も俄に悲しくなつて泣きたくなつた。涙は瞼を伝つて眼が曇つた。なぜ悲しくなつたか理由は判然しない。ただ民子が可哀相でならなくなつたのである。民子と僕との楽しい関係もこの日の夜までは続かなく、十三日の昼の光と共に全く消えうせてしまった。嬉しいにつけても思いのたけは語りつくさず、憂き悲しいことについては勿論百分の一だも語りあわないで、二人の関係は闇の幕に這入ってしまったのである。

十四日は祭の初日でただ物せわしく日がくれた。お互に氣のない風はしていても、手にせわしい仕事のあるばかりに、とにかく思い紛らすことが出来た。

十五日と十六日とは、食事の外用事もないままに、書室へ籠りとおしていた。ぼんやり机にもたれたなり何をするでもなく、また二人の関係をどうしようかという様なことすらも考えてはいない。ただ民子のことか頭に充ちているばかりで、極めて単純に民子を思っている外に考えは働いて居らぬ。この二日の間に民子と三四回は逢つたけれど、話も出来ず微笑を交換する元氣もなく、うら淋しい心持を互に目に訴うるのみであつた。二人の心持が今少しませて居つたならば、この二日の間にも將來の事など随分話し合うことが出来たのであろうけれど、しぶとい心持などは毛ほどもなかつた二人には、その場合になかなかそんな事は出来なかつた。それでも僕は十六日の午後になつて、何とはなしに以下のような事を巻紙へ書いて、日暮に一寸来た民子に僕が居なくなつてから見てくださいと云つて渡した。

朝からここへ這入つたきり、何をする気にもならない。外へ出る気にもならず、本を読む気にもならず、ただ繰返し繰返し民さんの事ばかり思つて居る。民さんと一所に居れば神様に抱かれて雲にでも乗つて居る様だ。僕はどうしてこんなになつたんだろう。学問をせねばな

らない身だから、学校へは行くけれど、心では民さんと離れたくない。民さんは自分の年の多いのを気にしているらしいが、僕はそんなことは何とも思わない。僕は民さんの思うとおりになるつもりですから、民さんもそう思っていて下さい。明日は早く立ちます。冬期の休みに帰ってきて民さんに逢うのを楽しみにして居ります。

十月十六日

政夫

民子様

学校へ行くとは云え、罪があつて早くやられると云う境遇であるから、人の笑声話声にも一々ひがみ心が起きる。皆一人に対する嘲笑かのように聞かれる。いつそ早く学校へ行ってしまいたくなつた。決心が定まれば元氣も恢復《かいふく》してくる。この夜は頭も少しくさえて夕飯も心持よくたべた。学校のこと何くれとなく母と話をする。やがて寝に就いてからも、

「何だ馬鹿馬鹿しい、十五かそこらの小僧の癖に、女のことなどばかりくよくよ考えて……そうだそうだ、明朝は早速学校へ行こう。民子は可哀相だけれど……もう考えまい、考えたって仕方がない、学校学校

……」

独口ききつつ眠りに入った様な訣であつた。

船で河から市川へ出るつもりだから、十七日の朝、小雨の降るのに、一切の持物をカバン一個につめ込み民子とお増に送られて矢切の渡へ降りた。村の者の荷船に便乗する訣でもう船は来て居る。僕は民さんそれじゃ……と言うつもりでも咽がつまって声が出ない。民子は僕に包を渡してからは、自分の手のやりばに困って胸を撫でたり襟を撫でたりして、下ばかり向いている。眼にもつ涙をお増に見られまいとして、体を脇へそらしている、民子があわれな姿を見ては僕も涙が抑え切れなかつた。民子は今日を別れと思つてか、髪はさっぱりとした銀杏返しに薄く化粧をしている。煤色と紺の細かい弁慶縞で、羽織も長着も同じい米沢紬に、品のよい友禅縮緬の帯をしめていた。襷を掛けた民子もよかつたけれど今日の民子はまた一層引立って見えた。

僕の気のせいでもあるか、民子は十三日の夜からは一日一日とやつれてきて、この日のいたいたしさ、僕は泣かずに居られなかつた。虫が知らせるとでもいうのか、これが生涯の別れにならうとは、僕は勿論

民子とて、よもやそうは思わなかったろうけれど、この時のつらさ悲しさは、とても他人に話しても信じてくれるものはないと思う位であった。尤も民子の思いは僕より深かったに相違ない。僕は中学校を卒業するまでにも、四五年間のある体であるのに、民子は十七で今年の内にも縁談の話があつて両親からそう言われれば、無造作に拒むことの出来ない身であるから、行末のことをいろいろ考えて見ると心配の多い訣である。当時の僕はそこまでは考えなかったけれど、親しく目に染みた民子のいたいたしい姿は幾年経つても昨日の事のように眼に浮んでいるのである。

余所から見たならば、若いうちによくあるいたずらの勝手な泣面と見苦しくもあつたであろうけれど、二人の身に取つては、真にあわれに悲しき別れであつた。互に手を取つて後来を語ることも出来ず、小雨のしよぼしよぼ降る渡場に、泣きの涙も人目を憚り、一言の詞もかわし得ないで永久の別れをしてしまったのである。無情の舟は流を下つて早く、十分間と経たぬ内に、五町と下らぬ内に、お互の姿は雨の曇りに隔てられてしまった。物も言い得ないで、しよんぼりと悄れていた不憫な民さんの俤、どうして忘れることが出来よう。民さんを思うために神の怒りに触れて即座に打殺さる様なことがあるとても僕には民さんを思わずに居られない。年をとつての後の考えから言えば、あアもしたらこうもしたらと思わぬこともなかったけれど、当時の若い同志の思慮には何らの工夫も無かつたのである。八百屋お七は家を焼いたらば、再度思う人に逢われることと工夫をしたのであるが、吾々二人は妻戸一枚を忍んで開けるほどの智慧も出なかつた。それほどに無邪気な可憐な恋でありながら、なお親に怖じ兄弟に憚り、他人の前にて涙も拭き得なかつたのは如何に気の弱い同志であつたらう。

僕は学校へ行ってからも、とかく民子のことばかり思われて仕方がない。学校に居つてこんなことを考えてどうするものかなどと、自分で自分を叱り励まして見ても何の甲斐もない。そういう詞の尻からすぐ民子のこと湧いてくる。多くの人中に居ればどうにか紛れるので、日の中はなるだけ一人で居ない様に心掛けて居た。夜になつても寝ると仕方がないから、なるだけ人中で騒いで居て疲れて寝る工夫をして居た。そういう始末でようやく年もくれ冬期休業になつた。

僕が十二月二十五日の午前前に帰つて見ると、庭一面に糶を干してあつ

て、母は前の縁側に蒲団を敷いて日向ぼっこをしていた。近頃はよほど体の工合もよい。今日は兄夫婦と男とお増とは山へ落葉をはきに行つたとの話である。僕は民さんとは口の先まで出たけれど遂に言い切らなかつた。母も意地悪く何とも言わない。僕は帰り早々民子のことを問うのが如何にも極り悪く、そのまま例の書室を片づけてここに落着いた。しかし日暮までには民子も帰ってくると思ひながら、おろおろして待つて居る。皆が帰つていよいよ夕飯ということになつても民子の姿は見えない、誰もまた民子のことを一言も言うものもない。僕はもう民子は市川へ帰つたものと察して、人に問うのもいまましいから、外の話もせず、飯がすむとそれなり書室へ這入つてしまった。

今日は必ず民子に逢われることと一方ならず楽しみにして帰つて来たのに、この始末で何とも言えず力が落ちて淋しかった。さりとして誰にこの苦悶を話しようもなく、民子の写真などを取出して見て居つたけれど、ちつとも気が晴れない。またあの奴民子が居ないから考え込んで居やがると思われるも口惜しく、ようやく心を取直し、母の枕元へいつて夜遅くまで学校の話をして聞かせた。

翌くる日は九時頃によく起きた。母は未だ寝ている。台所へ出て見ると外の者は皆また山へ往つたとかで、お増が一人台所片づけに残っている。僕は顔を洗つたなり飯も食わずに、背戸の畑へ出てしまった。この秋、民子と二人で茄子をとつた畑が今は青々と菜がほきている。僕はしばらく立つて何所を眺めるともなく、民子の俤を脳中にえがきつと思ひに沈んでいる。

「政夫さん、何をそんなに考えているの」

お増が出し抜けに後からそいつて、近くへ寄つてきた。僕がよい加減なことを一言二言いうと、お増はいきなり僕の手をとつて、も少しこちへきてここへ腰を掛けなさいまアと言いつつ、藁を積んである所へ自分も腰をかけて僕にも掛けさせた。

「政夫さん……お民さんはほんとに可哀相でしたよ。うちの姉さんたらほんとに意地曲りですからね。何という根性の悪い人だか、私もはアこのうちに居るのは厭になつてしまった。昨日政夫さんが来るのは解りきつて居るのに、姉さんがいるんなことを云つて、一昨日お民さんを市川へ帰したんですよ。待つ人があるだつぺとか逢いたい人が待ちどおかつぺとか、当こすりを云つてお民さんを泣かせたりしてね、お民さんにも何でもいろいろなこと言つたらしい、とうとう一昨日お昼前に帰し

てしまったのでさ。政夫さんが一昨日きたら逢われたんですよ。政夫さん、私はお民さんが可哀相で可哀相でならないだよ。何だつてあなたが居なくなつてからはまるで泣きの涙で日を暮らして居るんだもの、政夫さんに手紙をやりたけれど、それがよく自分には出来ないから口惜しいと云つてネ。私の部屋へ三晩も硯と紙を持ってきては泣いて居ました。お民さんも始まりは私にも隠していたけれど、後には隠して居られなくなつたのさ。私もお民さんのためにいくら泣いたか知れない……」

見ればお増はもうぼろぼろ涙をこぼしている。一体お増はごく人のよい親切な女で、僕と民子が目の前で仲好い風をすると、嫉妬心《しつとしん》を起すけれど、もとより執念深い性でないから、民子が一人になれば民子と仲が好く、僕が一人になれば僕を大騒ぎするのである。

それからなおお増は、僕が居ない跡で民子が非常に母に叱られたことなどを話した。それは概略こうである。意地悪の嫂が何を言うても、母が民子を愛することは少しも変らないけれど、二つも年の多い民子を僕の嫁にすることはどうしてもいけぬと云うことになつたらしく、それには嫂もいろいろ言うて、嫁にしないとすれば、二人の仲はなるだけ裂く様な工夫をせねばならぬ。母も嫂もそういう心持になつて居るから、民

子に対する仕向けは、政夫のことを思うて居ても到底駄目であると遠廻しに諷示して居た。そこへきて民子が明けてもくれてもくよくよとして、人の眼にもとまるほどであるから、時々は物忘れをしたり、呼んでも返辞が遅かつたりして、母の疝癩にさわつたことも度々あつた。僕が居なくなつてから二十日許り経つて十一月の月初めの頃、民子も外の者と野へ出るこゝとなつて、母が民子にお前は一足跡になつて、座敷のまわりを雑巾掛けてそれから庭に広げてある蓆を倉へ片づけてから野へゆけと言いつけた。民子は雑巾がけをしてからうっかり忘れてしまつて、蓆を入れずに野へ出た処、間がわるくその日雨が降つたから、その蓆十枚ばかりを濡らしてしまつた。民子は雨が降つてから気がついたけれど、もう間に合わない。うちへ帰つて早速母に詫びたけれど母は平日の事が胸にあるから、

「何も十枚ばかりの蓆が惜しいではないけれど、一体私の言いつけを疎かに聞いているから起つたことだ。もとの民子はそうでなかつた。得手勝手な考えごとなどしているから、人の言うことも耳へ這入らないのだ……」

という様な随分痛い小言を云つた。民子は母の枕元近くへいつて、ど

うか私が悪かったのですから堪忍して……と両手をついてあやまった。そうすると母はまたそう何も他人らしく改まってあやまらなくともだと叱ったそうで、民子はたまらなくなってワツと泣き伏した。そのまま民子が泣きやんでしまえば何のこともなく済んだであろうが、民子はとうとう一晩中泣きとおしたので翌朝は眼を赤くして居た。母も夜時々眼をさましてみると、民子はいつでも、すすすす泣いている声がしていたというので、今度は母が非常に立腹して、お増と民子と二人呼んで母が顫声になって云うには、

「相対では私がどんな我儘なことを云うかも知れないからお増は聞人になつてくれ。民子はゆうべ一晩中泣きとおした。定めし私に云われたことが無念でたまらなかつたからでしょう」

民子はこの私ほさうでありませんと泣声でいうたけれど、母は耳にもかけずに、

「なるほど私の小言も少し云い過ぎかも知れないが、民子だつて何もそれほど口惜しがつてくれなくてもよさそうなものじゃないか。私はほんとに考えると情なくなつてしまった。かわいがつたのを恩に着せるではないが、もとを云えば他人だけけれど、乳呑児の時から、民子はしょっちゅう家へきて居て今の政夫と二つの乳房を一つ宛含ませて居た位、お増がきてからもあの通りで、二つのものは一つ宛四つのもは二つ宛、着物を拵えてもあれに一枚これに一枚と少しも分け隔てをせないできた。民子も真の親の様に思つてくれ私も吾子と思つて余所の人は誰だつて二人を兄弟と思わないものはなかつたほどであるのに、あとにも先にも一度の小言をあんなに悔しがつて夜中泣いて呉れなくともよさそうなもの。市川の人達に聞かれたらば、斎藤の婆がどんな非度いことを云つたかと思つたろう。十何年という間我子の様に思つてきたこともただ一度の小言で忘れられてしまつたかと思つた私は口惜しい。人間というものはそういうものかしら。お増、よく聞いてくれ、私が無理か民子が無理かなアお増」

母は眼に涙を一ぱいに溜めてさういつた。民子は身も世もあらぬさまでいきなりにお増の膝へすがりついて泣き泣き、

「お増や、お母さんに申訣をしておくれ。私はそんなだいそれた了簡ではない。ゆんべあんなに泣いたは全く私が悪かつたから、全く私がとどかなかつたのだから、お増や、お前がよく申訣をさういつておくれ……」

それからお増が、

「お母さんの御立腹も御尤もですけれど、私が思うにやお母さんも少し勘違いをして御いでなさいます。お母さんは永年お民さんをおかわいがつて御いからです。お民さんの気質は解つて居りましょう。私もこうして一年御厄介になつて居てみれば、お民さんはほんと優しい温和しい人です。お母さんに少し許り叱られたつて、それを悔しがつて泣いたりなんぞする様な人ではありません。私がこんなことを申してはおかしいですが、政夫さんとお民さんとは、あアして仲好くして居たのを、何かの御都合で急にお別れなされたもんですから、それからというもの、お民さんは可哀相なほど元気がないのです。木の葉のそよぐにも溜息《ためいき》をつき鳥の鳴くにも涙ぐんで、さわれば泣きそうな風でいたところへ、お母さんから少しきつく叱られたから留度なく泣いたのでしよう。お母さん、私は全くそう思いますわ。お民さんは決してあなたに叱られたとて悔しがるような人ではありません。お民さんの様な温和しい人を、お母さんの様にあアいつて叱つては、あんまり可哀相ですわ」

お増が共泣きをして言訣をいうたので、もとより民子は憎くない母だから、俄に顔色を直して、

「なるほどお増がそういえば、私も少し勘違いをしていました。よくお増そういうてくれた。私はもうすっかり心持がなおつた。民や、だまつておくれ、もう泣いてくれるな。民やも可哀相であつた。なに政夫は学校へ行ったんじゃないか、暮には帰ってくるよ。なアお増、お前は今日は仕事を休んで、うまい物でも拵えてくれ」

その日は三人がいく度もよりあつて、いろいろな物を拵えては茶ことをやり、一日面白く話をした。民子はこの日はいつになく高笑いをし元氣よく遊んだ。何と云つても母の方は直ぐ話が解るけれど、嫂が間がな隙がな種々なことを言うので、とうとう僕の帰らない内に民子を市川へ歸したとの話であつた。お増は長い話を終るや否やすぐ家へ歸つた。

なるほどそうであつたか、姉は勿論母までがそういう心になつたでは、か弱い望も絶えたも同様。心細さの遺瀨がなく、泣くより外に詮がなかつたのだろう。そんなに母に叱られたか……一晩中泣きとおした……なるほどなどと思うと、再び熱い涙が漲り出してとめどがない。僕はしばらくの間、涙の出るがままにそこにぼんやりして居た。その日はとうとう朝飯もたべず、昼過ぎまで畑のあたりをうろついてしまった。

そうなると俄に家に居るのが厭でたまらない。出来るならば暮の内に

学校へ帰ってしまいたかったけれど、そうもならないでようやくこらえて、年を越し元日一日置いて二日の日には朝早く学校へ立ってしまった。今度は陸路市川へ出て、市川から汽車に乗ったから、民子の近所を通ったのであれど、僕は極りが悪くてどうしても民子の家へ寄れなかった。また僕に寄られたらば、民子が困るだろうとも思つて、いくたび寄ろうと思つたけれどついに寄らなかつた。

思えば実に人の境遇は変化するものである。その一年前までは、民子が僕の所へ来て居なければ、僕は日曜のたびに民子の家へ行つたのである。僕は民子の家へ行つても外の人には用はない。いつでも、

「お祖母さん、民さんは」

そら「民さんは」が来たといわれる位で、或る時などは僕がゆくと、民子は庭に菊の花を摘んで居た。僕は民さん一寸御出でと無理に背戸へ引張つて行つて、二間梯子を二人で荷い出し、柿の木へ掛けたのを民子に抑えさせ、僕が登つて柿を六個許りとる。民子に半分やれば民子は一つで沢山というから、僕はその五つを持ってそのまま裏から抜けて歸つてしまった。さすがにこの時は戸村の家でも家中で僕を悪く言つたそうだけれど、民子一人はただにこにこ笑つて居て、決して政夫さん悪いと

は言わなかつたそうだ。これ位隔てなくした間柄だに、恋ということ覚えてからは、市川の町を通るすら恥かしくなつたのである。

この年の暑中休みには家に帰らなかつた。暮にも帰るまいと思つたけれど、年の暮だから一日でも二日でも帰れというて母から手紙がきた故、大三十日の夜帰つてきた。お増も今年きりで下つたとの話でいよいよ話相手もないから、また元日一日で二日の日に出掛けようとする、母がお前にも言うて置くが民子は嫁に往つた、去年の霜月やはり市川の内で、大変裕福な家だそうだと、簡単にいうのであつた。僕はアそうですかと無造作に答えて出てしまつた。

民子は嫁に往つた。この一語を聞いた時の僕の心持は自分ながら不思議と思うほどの平気であつた。僕が民子を思っている感情に何らの動揺を起さなかつた。これには何か相当の理由があるかも知れねど、ともかくも事實はそうである。僕はただ理窟なしに民子は如何な境涯に入ろうとも、僕を思っている心は決して変らぬものと信じている。嫁にいろいろがどうしようが、民子は依然民子で、僕が民子を思う心に寸分の変りない様に民子にも決して変りない様に思われて、その観念は殆ど大石の上に坐して居る様で毛の先ほどの危惧心もない。それであるから民子は嫁

に往つたと聞いても少しも驚かなかつた。しかしその頃から今までにな
い考えも出て来た。民子はただただ少しも元気がなく、瘦衰えて鬱いで
許り居るだろうとのみ思われてならない。可哀相な民さんという観念ば
かり高まつてきたのである。そういう訣であるから、学校へ往つても以
前とは殆ど反対になつて、以前は勉めて人中へ這入つて、苦悶を紛らそ
うとしたけれど、今度はなるべく人を避けて、一人で民子の上に思いを
馳せて楽しんで居つた。茄子畑の事や棉畑の事や、十三日の晩の淋しい
風や、また矢切の渡で別れた時の事やを、繰返し繰返し考えては独り慰
めて居つた。民子の事さえ考えればいつでも気分がよくなる。勿論悲し
い心持になることがしばしばあるけれど、さんざん涙を出せばやはり跡
は気分がよくなる。民子の事を思つて居ればかえつて学課の成績も悪く
ないのである。これらも不思議の一つで、如何なる理由か知らねど、僕
は実際そうであつた。

いつしか月も経つて、忘れもせぬ六月二十二日、僕が算術の解題に苦
んで考えて居ると、小使が斎藤さんおうちから電報です、と云つて机の
端へ置いて去つた。例のスグカエシであるから、早速舎監に話をして即
日帰省した。何事が起つたかと胸に動悸をはずませて帰つて見ると、宵
闇の家の有様は意外に静かだ。台所で家中夕飯時であつたが、ただそこ
に母が見えない許り、何の変つた様子もない。僕は台所へは顔も出さず、
直ぐと母の寢所へきた。行燈の灯も薄暗く、母はひつたり枕に就いて臥
せつて居る。

「お母さん、どうかしましたか」

「ああ政夫、よく早く帰つてくれた。今私も起きるからお前御飯前なら
御飯を済ましてしまえ」

僕は何のことか頻りに気になるけれど、母がそういうままに早々に飯
をすまして再び母の所へくる。母は帯を結うて蒲団の上に起きていた。
僕が前に坐つてもただ無言でいる。見ると母は雨の様な涙を落して俯向
いている。

「お母さん、まあどうしたんでしょう」

僕の詞に励まされて母はようやく涙を拭き、

「政夫、堪忍してくれ……。民子は死んでしまった……。私が殺した様な
ものだ……」

「そりゃいつです。どうして民さんは死んだんです」

僕が夢中になって問返すと、母は嗚咽び返って顔を抑えて居る。

「始終をきいたら、定めし非度い親だと思うだろうが、こらえてくれ、政夫……お前に一言の話もせず、たつていやだと言う民子を無理に勧めて嫁にやったのが、こういうことになってしまった……たとい女の方が年上であろうとも本人同志が得心であれば、何も親だからとて余計な口出しをせなくもよいのに、この母が年 甲斐もなく親だてらにいらぬお世話を焼いて、取返しつかぬことをしてしまった。民子は私が手を掛けて殺したも同じ。どうぞ堪忍してくれ、政夫……私は民子の跡追ってゆきたい……」

母はもうおいおいおい声を立てて泣いている。民子の死ということだけは判ったけれど、何が何やら更に判らぬ。僕とて民子の死と聞いて、失神するほどの思いであれど、今日の前で母の嘆きの一通りならぬを見ては、泣くにも泣かれず、僕がおろおろしている所へ兄夫婦が出てきた。

「お母さん、まアそう泣いたって仕方がない」

と云えば母は、かまわずに泣かしておくれ泣かしておくれと云うのである、どうしようもない。

その間で嫂が僅に話す所を聞けば、市川の某という家で先の男の気性も知れているに財産も戸村の家に倍以上であり、それで向うから民子を強つての所望、媒妁人というのも戸村が世話になる人である、是非やりたい是非往つてくれということになった。民子はどうでもいやだと云う。民子のいやだという精神はよく判っているけれど、政夫さんの方は年も違い先の永いことだから、どうでも某の家へやりたいとは、戸村の人達は勿論親類までの希望であった。それでいよいよ斎藤のお母さんに意見を貰うということに相談が極り、それで家のお母さんが民子に幾度意見をして泣いてばかり承知しないから、とどのつまり、お前がそう剛情はるのも政夫の処へきたい考えからだろうけれど、それはこの母が不承知でならないよ、お前はそれでも今度の縁談が不承知か。こんな風に言われたから、民子はすっかり自分をあきらめたらしく、とうとう皆様のよい様にといつて承知をした。それからは何もかも他の言うなりになつて、霜月 半に祝儀をしたけれど、民子の心持がほんとうの承知でないから、向うでもいくらかいや気になり、民子は身持になつたが、六月でおりてしまった。跡の肥立ちが非常に悪くついに六月十九日に息を引き取った。病中僕に知らせようとの話もあつたが、今更政夫に知ら

せる顔もないという訣から知らせなかった。家のお母さんは民子が未だ口をきく時から、市川へ往って居って、民子がいけなくなると、もう泣いて泣いて泣きぬいた。一口まぜに、民子は私が殺した様なものだ、とばかりいつて居て、市川へ置いたではどうなるか知れぬという訣から、昨日車で家へ送られてきたのだ。話さえすれば泣く、泣けば私が悪かった悪かったと云って居る。誰にも仕様がなから、政夫さんの所へ電報を打った。民子も可哀相だしお母さんも可哀相だし、飛んだことになってしまった。政夫さん、どうしたらよいでしょう。

嫂の話で大方は判ったけれど、僕もどうしてよいやら殆ど途方にくれた。母はもう半気違いだ。何しろここでは母の心を静めるのが第一とは思ったけれど、慰めようがない。僕だっていつそ気違いになってしまつたらと思つた位だから、母を慰めるほどの気力はない。そうこうしている内にようやく母も少し落着いてきて、また話し出した。

「政夫や、聞いてくれ。私はもう自分の悪覚にあきれてしまった。何だつてあんな非度いことを民子に言つたつけかしら。今更なんぼ悔いても仕方がないけど、私は政夫……民子にこう云つたんだ。政夫と夫婦にすることはこの母が不承知だからおまえは外へ嫁に往け。なるほど民子は私

にそう云われて見れば自分の身を諦める外はない訣だ。どうしてあんな酷たらしいことを云つたのだろう。ああ可哀相な事をしてしまった。全く私が悪覚を云うた為に民子は死んだ。お前はネ、明朝は夜が明けたら直ぐに往つてよおく民子の墓に参つてくれ。それでお母さんの悪かったことをよく詫びてくれ。ねい政夫」

僕もようやく泣くことが出来た。たといどう都合があつたにせよ、いよいよ見込がなくなつた時には逢わせてくれてもよかつたろうに、死んでから知らせるとは随分非度い訣だ。民さんだつて僕には逢いたかつたろう。嫁に往つてしまつては申訣がなく思つたろうけれど、それでもいよいよの真際になつては僕に逢いたかつたに違いない。実に情ない事だ。考えて見れば僕もあんまり児供であつた。その後市川を三回も通りながらたずねなかつたは、今更残念でならぬ。僕は民子が嫁にゆこうがゆくまいが、ただ民子に逢いさえせばよいのだ。今一目逢いたかつた……次から次と果てしなく思ひは溢れてくる。しかし母にそういうことを言えば、今度は僕が母を殺す様なことになるかも知れない。僕は屹と心を取り直した。

「お母さん、真に民子は可哀相でありました。しかし取つて返らぬこと

をいくら悔んでも仕方がないですから、跡の事を懇にしてやる外はない。お母さんはただただ御自分の悪い様にばかりとっているけれど、お母さんとして精神はただ民子のため政夫のためと一筋に思ってくれた事ですから、よしそれが思う様にならなかつたとて、民子や私等が何とてお母さんを恨みましよう。お母さんの精神はどこまでも情心でしたものを、民子も決して恨んではいやしまい。何もかもこうなる運命であったのでしょう。私はもう諦めました。どうぞこの上お母さんも諦めて下さい。明日の朝は夜があけたら直ぐ市川へ参ります」

母はなお詞を次いで、

「なるほど何もかもこうなる運命かも知らねど今度という今度私はよく後悔しました。俗に親馬鹿という事があるが、その親馬鹿が飛んでもない悪いことをした。親がいつまでも物の解ったつもりで居るが、大へんな間違いであった。自分は阿弥陀様におすがり申して救うて頂く外に助かる道はない。政夫や、お前は体を大事にしてくれ。思えば民子はなが年の間にもついで私にさからつたことはなかつた、おとなしい児であつただけ、自分のした事が悔いられてならない、どうしても可哀相でたまらない。民子が今はの時の事もお前に話して聞かせたいけれど私とはとてもそれが出来ない」

などとまた声をくもらしてきた。もう話せば話すほど悲しくなるからとて強いて一同寝ることにした。

母の手前兄夫婦の手前、泣くまいとこらえてようやくこらえていた僕は、自分の蚊帳へ這入り蒲団に倒れると、もうたまらなく一度にこみ上げてくる。口へは手拭を噛んで、涙を絞った。どれだけ涙が出たか、隣室の母から夜が明けた様だよと声を掛けられるまで、少しも止まず涙が出た。着たままで寝ていた僕はそのまま起きて顔を洗うや否や、未だほの闇いのに家を出る。夢のように二里の路を走って、太陽がようやく地平線に現われた時分に戸村の家の門前まで来た。この家の竈のある所は庭から正面に見透して見える。朝炊きに麦藁を焚いてパチパチ音がする。僕が前の縁先に立つと奥に居たお祖母さんが、目敏く見つけて出てくる。「かねや、かねや、とみや……政夫さんが来ました。まア政夫さんよく来てくれました。大そう早く。さアお上んなさい。起き抜きでしょう。さア……かねや……」

民子のお父さんとお母さん、民子の姉さんも来た。

「まアよく来てくれました。あなたの来るのを待っていました。とにかく

に上つて御飯をたべて……」

僕は上りもせず腰もかけず、しばらく無言で立っていた。ようやく、「民さんのお墓に参りにきました」

切なる様は目に余つたと見え、四人とも口がきけなくなってしまった。……やがてお父さんが、

「それでもまア一寸御飯を済して往つたら……あアそうですか。それでは皆して参つてくるがよかるう……いや着物など着替えんでよいじゃないか」

女達は、もう鼻吸りをしながら、それじゃアとて立ちあがる。水を持ち、線香を持ち、庭の花を沢山に採る。小田巻草千日草 天竺牡丹と各々手にとり別けて出かける。柿の木の下から背戸へ抜け槇屏の裏門を出ると松林である。桃畑梨畑の間をゆくと僅の田がある。その先の松林の片隅に雑木の森があつて数多の墓が見える。戸村家の墓地は冬青四五本を中心として六坪許りを区別けしてある。そのほどよい所の新墓が民子が永久の住家であつた。葬りをしてから雨にも逢わないので、ほんの新らしいままで、力紙なども今結んだ様である。お祖母さんが先に出でて、「さア政夫さん、何もかもあなたの手でやつて下さい。民子のためには

真に千僧の供養にまさるあなたの香花、どうぞ政夫さん、よおくお参りをして下さい……今日は民子も定めて草葉の蔭で嬉しかろう……なあ此人にせめて一度でも、目をねむらない民子に……まアせめて一度でも逢わせてやりたかつた……」

三人は眼をこすっている様子。僕は香を上げ花を上げ水を注いで前から蹲つて心のゆくまで拝んだ。真に情ない訣だ。寿命で死ぬは致方ないにしても、長く煩つて居る間に、あア見舞つてやりたかつた、一目逢いたかつた。僕も民さんに逢いたかつたもの、民さんだつて僕に逢いたかつたに違いない。無理無理に強いられたとは云え、嫁に往つては僕に合わせる顔がないと思つたに違いない。思えばそれが愍然でならない。あんな温和しい民さんだもの、両親から親類中かかつて強いられ、どうしてそれが拒まれよう。民さんが気の強い人ならきつと自殺をしたのだけれど、温和しい人だけにそれも出来なかつたのだ。民さんは嫁に往つても僕の心に変りはないと、せめて僕の口から一言いつて死なせたかつた。世の中に情ないといつてこういう情ないことがあるか。もう私も生きて居たくない……吾知らず声を出して僕は両膝と両手を地べたへ突いてしまった。

僕の様子を見て、後に居た人がどんなに泣いたか。僕も吾一人でないに気がついてようやく立ちあがった。三人の中の誰がいうのか、
「なんだって民子は、政夫さんということば一言も言わなかったのだろ……」

「それほどに思い合ってる仲と知ったらあんなに勧めはせぬものを」

「うすうすは知れて居たのだに、この人の胸も聞いて見ず、民子もあれほどいやがったものを……いくら若いからとてあんまりであった……可哀相に……」

三人も香花を手向け水を注いだ。お祖母さんがまた、

「政夫さん、あなた力紙を結んで下さい。沢山結んで下さい。民子はあなたが情の力を便りにあの世へゆきます。南無阿弥陀仏、南無阿弥陀仏」

僕は懐にあつた紙の有りたけを力杖に結ぶ。この時ふつと気がついた。民さんは野菊が大変好きであつたに野菊を掘ってきて植えればよかった。いや直ぐ掘ってきてきて植えよう。こう考えてあたりを見ると、不思議に野菊が繁つてる。弔いの人に踏まれたらしいがなお莖立って青々として居る。民さんは野菊の中へ葬られたのだ。僕はようやく少し落着いて人々と共に墓場を辞した。

僕は何にもほしくありません。御飯は勿論茶もほしくありません、このままお暇願います、明日はまた早く上りますからといって帰ろうとする、家中で引留める。民子のお母さんはもうたまらなそうな風で、

「政夫さん、あなたにそうして帰られては私等は居ても起つてもいられません。あなたが面白くないお心持は重々察しています。考えてみれば私どもの届かなかつたために、民子にも不憫な死にようをさせ、政夫さんにも申訣のないことをしたのです。私共は如何様にもあなたにお詫びを致します。民子可哀相と思召したら、どうぞ民子が今のは話も聞いて行つて下さいな。あなたがお出でになったら、お話し申すつもりで、今日はお出でか明日はお出でかと、実は家中がお待ち申したのでですからどうぞ……」

そう言われては僕も帰る訣にゆかず、母もそう言ったのに気がついて座敷へ上った。茶や御飯やと出されたけれども真似ばかりで済みます。その内に人々皆奥へ集りお祖母さんが話し出した。

「政夫さん、民子の事については、私共一同誠に申訣がなく、あなたに合せる顔はないのです。あなたに色々御無念な処もありましようけれど、

どうぞ政夫さん、過ぎ去った事と諦めて、御勘弁を願います。あなたにお詫びをするのが何より民子の供養になるのです」

僕はただもう胸一ぱいで何も言うことが出来ない。お祖母さんは話を続ける。

「実はと申すと、あなたのお母さん始め、私また民子の両親とも、あなたと民子がそれほど深い間であったとは知らなかったもんですから」

僕はここで一言いいだす。

「民さんと私と深い間とおっしゃっても、民さんと私とはどうもしやしません」

「いえ、あなたと民子がどうしたと申すではないのです。もともとあなたと民子は非常な仲好しでしたから、それが判らなかつたんです。それに民子はあの通りの内気な兎でしたから、あなたの事は一言も口に出さない。それはまるきり知らなかつたとは申されません。それですからお詫びを申す様な訣……」

僕は皆さんにそんなにお詫びを云われる訣はないという。民子のお父さんはお詫びを言わしてくれという。

「そりゃ政夫さんのいうのは御もつともです、私共が勝手なことをして、勝手なことをお前さんに言うというものですが、政夫さん聞いて下さい、理窟の上のことではないです。男親の口からこんなことをいうも如何《いか》ですが、民子は命に替えられない思いを捨てて両親の希望に従ったのです。親のいいつけで背かれなれないと思つても、道理で感情を抑えるは無理な処もあります。民子の死は全くそれ故ですから、親の身になつて見ると、どうも残念であります、どうもしやしませんと政夫さんが言う通り、お前さん等二人に何の罪もないだけ、親の目からは不憫が一層でな。あの通り温和しかつた民子は、自分の死ぬのは心柄とあきらめてか、ついぞ一度不足らしい風も見せなかつたです。それやこれやを思いますとな、どう考えてもちと親が無慈悲であつた様で……。政夫さん、察して下さい。見る通り家中がもう、悲しみの闇に鎖されて居るのです。愚かなことでしょうかこの場合お前さんに民子の話を聞いて貰うのが何よりの慰藉に思われますから、年がいもないこと申す様だが、どうぞ聞いて下さい」

お祖母さんがまた話を続ける。結婚の話からいよいよむずかしくなつたまでの話は嫂が家での話と同じで、今はという日の話はこうであつた。「六月十七日の午後に医者がきて、もう一日二日の処だから、親類など

に知らせるならば今日中にも知らせるがよいと言いますから、それではとて取敢ずあなたのお母さんに告げると十八日の朝飛んできました。その日は民子は顔色がよく、はつきりと話も致しました。あなたのおっかさんがきまして、民や、決して気を弱くしてはならないよ、どうしても今一度なおる気になつておくれよ、民や……民子はにっこり笑顔さえ見せて、矢切のお母さん、いろいろ有難う御座います。長長可愛がつて頂いた御恩は死んでも忘れません。私も、もう長いことはありません……。民や、そんな気の弱いことを思つてはいけません。決してそんなことはないから、しっかりとしないではいけません、あなたのお母さんが云いましたら、民子はしばらくたつて、矢切のお母さん、私は死ぬが本望であります、死ねばそれでよいのです……といひましてからなお口の内で何か言つた様で、何でも、政夫さん、あなたの事を言つたに違ひないですが、よく聞きとれませんでした。それきり口はきかないで、その夜の明方に息を引取りました……。それから政夫さん、こういう訣です……夜が明けてから、枕を直させます時、あれの母が見つめました、民子は左の手に紅絹の切れに包んだ小さな物を握つてその手を胸へ乗せているのです。それで家中の人が皆集つてそれをどうしようかと相談しまして……」

お祖母さんが、泣き出して、そこにいた人皆涙を拭いている。僕は一心に畳を見つめていた。やがてお祖母さんがようよう話を次ぐ。

「そのお手紙をお富が読みましたから、誰も彼も一度に声を立つて泣きました。あれの父は男ながら大声して泣くのです。あなたのお母さんは、気がふれはしないかと思うほど、口説いて泣く。お前達二人がこれほどの語らいとは知らずに、無理無体に勧めて嫁にやつたは悪かった。ああ悪いことをした、不憫だった。民や、堪忍して、私は悪かったから堪忍してくれ。俄の騒ぎですから、近隣の人達が、どうしましたと云つて尋ねにきた位であります。それであなたのお母さんはどうしても泣き止まないです。体に障つてはと思ひまして葬式が済むと車で御送り申した次第です。身を諦めた民子の心持が、こう判つて見ると、誰も彼も同じことで今更の様に無理に嫁にやつた事が後悔され、たまらないですよ。考えれば考えるほどあの児が可哀相で可哀相で居ても起つても居られない

い……せめてあなたに来て頂いて、皆が悪かったことを十分あなたにお詫びをし、またあれの墓にも香花をあなたの手から手向けて頂いたら、少しは家中の心持も休まるかと思ひまして……今日のことをなんぼう待ちました。政夫さん、どうぞ聞き分けて下さい。ね、民子はあなたにはそむいては居ません。どうぞ不憫と申うてやっして下さい……」

一語一句皆涙で、僕も一時泣きふしてしまった。民子は死ぬのが本望だと云ったか、そうだったか……家の母があんなに身を責めて泣かれるのも、その筈であった。僕は、

「お祖母さん、よく判りました。私は民さんの心持はよく知っています。去年の春、民さんが嫁にゆかれたと聞いた時でさえ、私は民さんを毛ほども疑わなかったですもの。どの様なことがあるうとも、私が民さんと思う心持は変わりません。家の母などもただそればかり言っただけで居ますが、それも皆悪気があつての業でないので、私は勿論民さんだつて決して恨みに思やしません。何もかも定まつた縁と諦めます。私は半分毎日お墓へ参ります……」

話しては泣き泣いては話し、甲一語乙一語いくら泣いても果てしがない。僕は母のことも気にかかるので、もうお昼だという時分に戸村の家を辞した。戸村のお母さんは、民子の墓の前で僕の素振りが余り痛わしかったから、途中が心配になると、自分で矢切の入口まで送ってきてくれた。民子の愀然なことはいくら思うても思いきれない。いくら泣いても泣ききれない。しかしながらまた目の前の母が、悔悟の念に攻められ、自ら大罪を犯したと信じて嘆いている愀然さを見ると、僕はどうしても今は民子を泣いては居られない。僕がめそめそして居ったでは、母の苦しみは増すばかりと気がついた。それから一心に自分で自分を励まし、元気をよそおうてひたすら母を慰める工夫をした。それでも心にならぬ事は仕方のないもの、母はいつしかそれと気がついてる様子、そうなのは僕が家に居ないより外はない。

毎日 七日の間市川へ通つて、民子の墓の周囲には野菊が一面に植えられた。その翌くる日に僕は十分母の精神の休まる様に自分の心持を話して、決然学校へ出た。

*

*

*

民子は余儀なき結婚をして遂に世を去り、僕は余儀なき結婚をして長

らえている。民子は僕の写真と僕の手紙とを胸を離さずにとって居よう。
幽明 遙けく隔つとも僕の心は一日も民子の上を去らぬ。

この文は、インターネットの図書館、青空文庫 (<http://www.aozora.gr.jp/>) で作られたデータを利用していただいています。注意書き・ルビ等は電本座の編集上の都合により省略したり、変更しているものもあります。底本・注意書き・データ入力・校正など詳細を必要とされる方は、青空文庫をご覧ください。